



Title	「発話関数」試論
Author(s)	長谷川, 存古
Citation	Osaka Literary Review. 1978, 17, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25680
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「発話関数」試論

長谷川 存 古

0. はじめに

命題の真偽値といった意味論の次元とは別の次元として、文の発話を取り扱う語用論の次元を確立することは、自然言語の研究におけるもっとも新しい課題となっている。特に Grice (1967) による, Cooperative Principle を初めとした体系の提起と、自然言語の論理にたいするその適用の試みが、その後の語用論研究にきわめて大きな影響を及ぼしていることは周知のとおりであろう。

本論は、Austin を経て Grice (1967) によって確立された発話の適否 (Appropriateness)、適格条件 (Appropriateness Condition)、Conversational Implicature といった一連の概念を筆者の立場から整理し、新たな形式化を行おうとした試みである。まずはじめに、この問題についての筆者の従来の論の中の欠陥を修正し、次にこれについての形式化の試みとして、発話関数 (Utterance Function) の概念を提唱する。最後に、筆者の従来の誤りに関連して、Grice によって Conversational Implicature と呼ばれている現象の中にも、少なくとも二つの、かなり性格の異なったものがあり、これらをはっきり区別する必要があることを指摘する。

1. Conversational Implicature

まず、次の Grice (1967) の例の検討から始めよう。

- (1) If a man driving down a normal road stops at every house-entrance to make sure that no dog is about to issue from it at break-neck speed, we should not naturally describe him as 'driving carefully'; nor would we naturally ascribe carefulness to a bank-clerk who recounted the bank-notes he was about to hand to me fifteen times. Grice (1967), Part I, p. 8.

問題になっているのは、犬の飛び出しを警戒するあまり、一軒一軒の門口で車を止めながら道を進んで行く男がいるとしたら、この男について ‘carefully’ という語を使うのはおかしくないかということである。また紙幣を客に渡す前に15回も算えなおす銀行員についても、‘carefully’ の語を使うのは自然かどうかという問題である。

ここで、

(2) $p = \text{He is driving with painstaking effort to avoid accidents.}$
 とおけば、^{くみ}件の男について、命題 ‘ p ’ が True であることは明らかである。しかし、次に

(3) $c = \text{His precautionary steps are reasonable.}$
 とおけば、この男については、命題 ‘ c ’ は False となる。

そこで最後に

(4) $q = \text{He is driving carefully.}$
 という命題を問題としたばあい、問題の男について命題 ‘ q ’ はあてはまるかどうか、あてはまらないとすればそのことはどのようにして説明すべきかが、ここでの問題である。

件の男について命題 ‘ q ’ を主張することの ‘unnaturalness’ (おかしさ) を説明する方法として、次の二つが考えられる。

一つの立場は、すべてを「命題の真偽値」という意味論の次元で解決しようという立場である。この立場に立てば、‘ p ’ が True であっても、‘ c ’ が False である限り、‘ q ’ そのものも False であるということになる。

これにたいして、Grice (1967) 自身の立場は、この問題を、意味論によってではなく、「発話の適否 (Appropriateness)」の問題として、語用論の次元で解決しようとするものである。すなわち、‘ p ’ が True のときは ‘ q ’ も常に True なのだが、ただ ‘ p ’ が True でも ‘ c ’ が False のときは、‘ q ’ を主張する発話が不適切 (Inappropriate) になってしまうというのである。

ところで筆者は、長谷川 (1977) で、以上の二つの対立した考え方を、

表 (5) のように形式化した。

(5)

p	c	q	q	$U(q)$
T	T	T	T	A
T	F	F	T	I
F	T	F	F	A
F	F	F	F	I

$U(q)$: 文 ‘ q ’ の発話

A : Appropriate

I : Inappropriate

(a) (b)

(長谷川 (1977), p. 97.)

(a) が意味論により解決しようとする立場を示しており, (b) が語用論による立場を示している。(a) では $q = p \wedge c$ となっており, 一方 (b) では $p = q$ の関係となっている。従って, この表の 2 段目で p が T, c が F のとき, (a) では q そのものが F となるが, (b) では q の真偽値は T であり, $U(q)$ が Inappropriate になっている。

ところでこの表を再検討すると, 明らかに誤りが含まれていることがわかる。表 (5) の第 3 段目を見ると, ($p = F$, $c = T$) の組み合わせが見られる。しかし, 二つの命題の内容を検討すれば, p が False でありながら c が True である場合はありえないことが明らかである。 p が False であるとは, その男が乱暴運転をしているということであり, 乱暴運転をしな

(3) $c = \text{His precautionary steps are reasonable.}$

が True ということとはありえないことである。‘His precautionary steps’ はすでに ‘ p ’ が True であることを前提にしているのである。表 (5) についていえば, いかなるばあいにも, 3 段目の $p = F$, かつ $c = T$ のばあいは起りえないのである。

このことは, ‘Presupposition’ などの概念とも関係してくるであろうが, ここでは ‘ c ’ と ‘ p ’ の関係を,

(6) $c \Rightarrow p$

すなわち ‘ c は p の十分条件, p は c であるための必要条件である。’ と押えておきたい。

2. Utterance Function への試み

2. 1. いま、Grice の次の例をとりあげて検討してみたい。

- (7) A is writing a testimonial about a pupil who is a candidate for a philosophy job, and his letter reads as follows: 'Dear Sir, Mr. X's command of English is excellent, and his attendance at tutorials has been regular. Yours, etc.' (Gloss: A cannot be opting out, since if he wished to be uncooperative, why write at all? He cannot be unable, through ignorance, to say more, since the man is his pupil; moreover, he knows that more information than this is wanted. He must, therefore, be wishing to impart information that he is reluctant to write down. This supposition is tenable only on the assumption that he thinks Mr. X is no good at philosophy. This, then, is what he is implicating.)
- Grice (1975), p. 52.

ここで、

- (8) p = Mr. X's command of English is excellent, and his attendance at tutorials has been regular.

とする。

この、推薦状という Context の中での文(8)は、明らかに 'Saying' のレベルでは「場違い」な文である。(Grice の立場では CP に反している。)しかし、我々は、この Context の中での文(8)によって、推薦状の筆者が何を言おうとしているのかを知っている。すなわち、ここで推薦状の筆者が 'Implicate' しているのは次の命題である。

- (9) c = Mr. X is no good at philosophy.

' p 'の発話によって Implicate されているのが ' c 'であることを知るのは、明らかに我々の言語能力の一部である。

ではここで、' p 'と ' c 'との関係とは厳密には何なのであろうか。 ' c 'を Implicate すること、(いわば、明示しないで主張すること)が、' p 'の発話 Up が適格であるための条件であるということがその関係であると考えられる。

ここで、これまで述べてきたところを次のように形式化してみたい。

まず、命題の Truth Value (真偽値) に対応する概念として、発話の Appropriateness Value (適否値) という概念を設定したい。そして命題関数に対応する「発話関数」(Utterance Function) が、‘Appropriate’ または ‘Inappropriate’ のいずれかの Appropriateness Value をとるとするのである。

Utterance Function の variable としては、その Utterance の Environment: E と、その Utterance の Implicatum¹⁾: c がある。したがって、この関数は、

$$(10) \quad U_p(E, c) = A \text{ or } I \quad \text{となる。}$$

この関数の形式は、さらに改良することが可能であり、必要であろうが、とりあえずこのような形式化を行っておくことは、議論の展開のためにきわめて有効であると考えられる。

この関数に関して、次の諸点に注意する必要があると思われる。

2. 2. まず、命題‘p’の発話 U_p の Appropriateness Value の決定に当って、‘p’の Truth Value 自体は関わりがないということである。具体的に推薦状のばあいについて考えてみると、現実に当の人物: X の英語力が優れていようといまいと、またその出席率がよかろうと悪かろうと、要はその発話 U_p が、‘c’を Implicate するに適切なものであればよいのである。‘p’の真偽に関係なく、‘c’を Implicate するという目的さえ果すならば、 U_p は完全に適格な発話としての地位を保つのである。

この点についてさらに一般的に言えば、ある命題の発話の適否は、その命題の真偽とは直接に関連するものではないと筆者は考える。False Statement も、少なくともその Appropriateness に関しては、True Statement とまったく同等の地位を保持しているのがわれわれの言語使用の現実の姿であり、このことを明確に ‘account for’ する理論が、語用論において必要であると考えられる。Grice の体系に即して言えば、その

Maxims の中の Quality に関するもの、すなわち

- (11) 1. Do not say what you believe to be false.
 2. Do not say that for which you lack adequate evidence.
 (Grice (1975), p. 46.)

の二つの地位が問題である。もちろんこの二つの Maxims がまったく存在しない、あるいは無価値であるというのではないが、少なくとも、これらに対する違反が、ただちにその発話の Appropriateness Value に影響を及ぼすとは考えられない。いずれにしてもこの点は、問題を Knowledge, Belief の二つの次元に分離して、深く追究する必要があると考えられる。

2. 3. 「発話関数」についての次の問題は、*c* (Implicatum) の値と Appropriateness Value との対応の問題である。推薦状の例についていえば、(8) の文の発話 *Up* が 'Appropriate' という値をとるのは '*c*' が (9) の値をとるときである。では、*Up* が Appropriate の時は '*c*' は (9) であり、'*c*' が例えば

- (12) He is an excellent philosopher.

のときは *Up* は Inappropriate になるという我々の Linguistic Knowledge はいかにして説明できるかが問題である。Grice の Maxims によって、これがなしうるかどうか、一層の解明が必要であろう。

2. 4. 先に、Proposition あるいは Sentence の Truth Value に対応するものとして、Utterance の Appropriateness Value を設定したが、この両者の間には、実は極めて重大な点での相違がある。それは、現実に行われる 'normal conversation' においては、すべての Utterance の値は Appropriate になるということである。

ここで、まず 'normal conversation' とは何かが問題になる。ここでも、文についての Grammatical Sentence とのアナロジーは、可能な限り追求するのがよいであろうと考えられる。すなわち、文の文法性と同様に、

Conversation におけるある発話の Normality (正常度) の判定の根拠は、native speaker の Intuition (直観) に究極的には、委ねられねばならないであろう。²⁾ しかし、Conversation の正常度の判定は、文の文法性の判定とは比較にならぬほど画然性を欠いたものになるであろうことは容易に想像できる。(これはこの点に限らず Pragmatics 全体をおおう特性である。)

このように、‘native speaker’ の直観によって、Conversation の中での任意の発話の Appropriateness Value が判定されるわけだが、ここで「normal conversation においてはすべての発話は Appropriate と考えられる。」ということと、(10) の Utterance Function との関係を考察する必要がある。

まず (10) に示されたようなかたちの Utterance Function の扱う Utterance は、Grammar³⁾ の扱う Sentence と同じく、「すべての可能な Utterance (現実に発話されると否とにかかわりなく) である。」「すべての可能な Utterance に対してこの関数は A または I のいずれかの値を付与すると考えられる。現実に我々が Conversation の中で言語的及び非言語的環境 (Environment) と、我々の主張したい命題とを勘案しながら発話すべき文を選んでゆくときその基礎になっている我々の言語能力は、この関数と同じ機能を果しており、この能力を ‘account for’ するものとして、上記の関数を構想することはきわめて妥当であると考えられる。

先述したとおり、我々が Utterance を発した他人の Utterance を聴きとってゆくという Performance の中で、我々の言語能力が発現する第一の Process は Conversation の各々の時点での、我々自身の言語行動の選択である。各々の時点で我々は Appropriate な発話を選択して発するか、それとも沈黙を守るかのいずれかである。⁴⁾ 次に第二の Process は、他者の発話を聴いて解釈を加えてゆく Process であり、発話関数はこのように発現する言語能力をも ‘account for’ するのであるが、ここで発話関数は特異なかたちをとって現われる。通常は、他者が現実にすでに

発した発話はすべて ‘Appropriate’ という値を一律にとると前提しなければならない、という点がそれである。

この点を、文の Grammaticalness と対比しながら考察しよう。先述のように文の Grammaticalness も、発話の Appropriateness も、native speaker の Intuition によって判断される点では同じである。しかし、文の Grammaticalness の度合は、もちろんいろいろ複雑な問題をはらんでいるにせよ、任意の一文のみを対象として、文字通り直観的に判定を下す性質のものである。

これにたいして、発話の Appropriateness は、第一に、その発話のみを孤立して観察するのではなく、その Environment の中で観察してはじめて判定が可能であり、第二に、その Environment の中でも話者がその発話によって示唆しようとする Implicatum 自体は、外部からの観察が不可能なものである、という二つの特性を持っている。その結果、現実の Conversation の中で発された発話は、それが「突拍子もない」、Inappropriate なものであるということがきわめて明白に直観に映ずる発話は例外として、それ以外の大多数の発話は、それが現に発されたというその事実によって、Appropriate という値を付与されざるを得ないのである。そして、他者の発話を聞いたばあいには、それが Appropriate であることを前提として、われわれの Performance は Implicatum の推定へと進むほかないのである。

2. 5. 発話関数は、我々の言語能力を ‘account for’ するものとして提示された。そして、その言語能力の中の一つは、任意の環境の中での任意の発話に ‘Appropriate’ という値を与えるべき Implicatum を推定する能力である。しかし、ここで注意すべきなのは、この能力は確かに我々の言語能力の一部ではあるが、では、‘an ideal speaker-hearer’ を想定したばあいには、彼の言語能力では、(10)において、 U_p , E , A を与えれば ‘c’ が一義的に定まるかといえ、決してそうではないということである。いい

かえれば、特定の Environment の中で特定の発話 Up が何を Implicate しているかについて、話者と聴者のあいだに相違が生じ、誤解が生ずることがしばしばあるが、このとき、どちらか一方の解釈が正しく他方が誤まっているということでは決してないということである。‘ c ’は必ずしも一義的な値をとらず、このような誤解は言語にとって必然的なものではないかとさえ考えられる。

3. 2種の Conversational Implicature

これまでの論議をふまえて、最後に(7)の推薦状のばあいの‘ p ’と‘ c ’との関係を、(1)の場合と比較しながら検討してみよう。(1)の場合は、‘ p ’が False で‘ c ’が True のばあいはいりえなかった。しかし、(7)のばあいは、‘ p ’が False で‘ c ’が True のばあいも大いにありうる。むしろそれが常態だからこそ Up が‘ c ’を Implicate するための格好の発話となりえたのである。‘ c ’は‘ p ’の真偽値とは関係なく、ただ Up の Appropriateness Value と関係を持つだけである。この関係は、長谷川 (1977) で次のように形式化したとおりである。

(13)

c	U
T	A
F	I

(長谷川 (1977), p. 106.)

これまでの論で明らかなように、Implicatum には、その Implicatum の真偽値と発話される命題自身の真偽値とが関係を持つものと、まったく無関係なものがある。(1)のばあいのように、‘ p ’が True であるときだけ‘ c ’が True になりうるばあいと、推薦状のばあいのように Up はただ発話としての地位しか持たないものがある。そして Grice が自然言語の論理のばあいには利用しているのは前者のものであり、推薦状のばあいのような一般的なものとは異なっていることに注目すべきである。

以上、「発話関数」の概念の提起を中心として、語用論の中心でないいくつかの問題の大まかな検討を行なった。

注

- 1) ‘Implicature’ が ‘Implication’ そのものに対応する概念であるのに対して、‘Implicatum’ は ‘what is implied’ に対応する概念である。(Grice (1975), pp. 43-44, 参照)
- 2) ここで ‘native’ speaker の概念が現われることは、Conversation の分析等においても、それぞれの自然言語の特性と、Linguistic Universality という、二重の次元を設定する必要があることを示唆していると考えられる。
- 3) ‘Grammar’ には、Utterance を扱う ‘Pragmatic Component’ もその構成部門として含まれるとの立場も考えられ、本論も全体としてそのような立場をとっているが、この箇所では文を対象とする従来の Grammar として一般的に使っている。
- 4) この沈黙を守るか否かの選択は、いかなる文を発話すべきかという選択以上の、より根源的な選択であるが、語用論の従来の成果の中でこの問題がどの程度まで問題意識として採り上げられてきたか、筆者は確認していない。

REFERENCES

- Austin, J. L. 1975. How to do things with words, 2nd ed., ed. by J. O. Urmson and Marina Sbisa. Cambridge, Mass.: Harvard U P.
- Cohen, L. Jonathan. 1971. Some remarks on Grice's views about the logical particles of natural language. *Pragmatics of natural languages*, ed. by Yehoshua Bar-Hillel, 50-68. (Synthese library.) Dordrecht-Holland: D. Reidel.
- Grice, H. P. 1967. Logic and conversation. Unpublished manuscript.
- . 1975. Logic and conversation. *Syntax and semantics*, vol. 3, speech acts, ed. by Peter Cole and Jerry L. Morgan, 41-58. New York: Academic Press.
- 長谷川存古. 1974. 語用論への一視角. *Osaka literary review*. Vol. 13. 16-26.
- . 1977. 「自然言語の論理」への一考察. 桃山学院大学人文科学研究. 12巻1号. 89-112.

毛利可信. 1972. 意味論から見た英文法. 東京:大修館.

_____. 1974a. 語用論の諸問題. 英語青年. 119. 667-669.

_____. 1974b. 情報価値についての語用論. 英語文学世界. 8巻12号.
10-13.

_____. 1978. 語用論と文章論. 言語. Vol. 7, No. 5. 23-31.

成田義光. 1976. 対話の言語. 英語青年. 122. 124-126.

安井 稔. 1978. 言外の意味. 東京:研究社.